

## 進学アスピレーションに対するトラッキングと 入試制度の影響

### Influences of Tracking and Entrance Examination Systems on Students' Aspirations for Advancement to Higher Education

中 澤 渉  
Wataru NAKAZAWA

#### 1 はじめに

多くの都道府県において、公立高校には入試難易度に基づくランキング（学力の格差）が存在していることは、周知の事実となっている。日本の教育社会学において、このような高校間の格差は、学力別学級編成により（卒業後の進路選択などにおける）予期的社会化を起こさせるといわれる米国のトラッキングと重ね合わせて理解されてきた（藤田 1980）。また、米国の社会階層の研究における地位達成モデルにおいて、学生時のアスピレーションの持つ効果の重要性も、ウィスコンシン大学のグループによって次々に発表され、それらはウィスコンシン・モデルと呼ばれて発展を遂げてきたこともよく知られている<sup>1)</sup>。こういった研究の文脈を踏まえて、特に日本では、生徒の進学希望を示すアスピレーションの強さが、その生徒の所属する高校ランクや学科、またそれに付随する学校組織や進路指導の特徴によって、（本人の成績と独立に）強く影響を受けるということを指摘する研究がしばしば現れた（岩木 1980；耳塚ほか 1981；竹内 1995など）。

トラッキングが問題視されるのは、次のような理由においてである。もし学力に基づいて学級組織編成がなされれば、その中で子どもたちは当然社会化が行われる。またその組織を巣立っていった卒業生が先に存在することが普通だろうから、その彼らの進路をみて、実現可能性を考慮した進路選択を行う生徒が多数を占めるだろう。要するに、制度的に進学機会が閉ざされていなくとも、自分が所属する学校ランクに基づいて、「それ相応の」選択を自ら行う、ということである。もしそうなのだとすると、トップランクの学校に進学すれば、自分の成績にかかわらず、より威信の高い上級学校を選択しようとするだろう。逆に、ランクの低い学校に進学してしまうと、その後成績が伸びて（客観的には進学可能性があっても）本人がそれほど高望みしなくなる、ということが起こるだろう。このように、学校組織の在り方が（制度的な問題と別に）進路選択に制約を

加えることが、いわゆるトラッキングの効果なのである(Oaks 1985)。だとすれば、(トップランクに進学した生徒は別として)特にランクの低い学校に進学してしまった場合に、自らを不当に貶めて評価し、進路選択の幅を狭めてしまう、ということになる<sup>2)</sup>。であるから、トラッキングの効果を弱めるには、トラッキング効果の起こりにくい組織構造を作ること、つまり学校間の学力格差をなくすことが、第一の対策として考えられよう。

もっとも、トラッキング効果のような現象は、経験的に多くの人が知っていることだろう。だからこそ、最終的に有名な大学に進学したいと思うのであれば、早い段階から中高一貫校を選んだり、高校入試ではより威信の高い学校を受験しようとするのである。そこで従来から、高校間格差が過度の受験競争を生む根源であると指摘され続けており、その高校間格差構造を打破するような制度の確立が求められてきた。代表的なのが、学校群制度や総合選抜制度とよばれるもので、学校間における生徒の学力を平準化させるために、意図的に生徒をいくつかの高校間で(特定の学校だけに過度に成績のよい生徒が集中しないように)割り振るのである。この制度は、高校入試発足当時から一部で見られたが、特に西日本を中心とした(特に大都市圏を中心とした)市域や府県で採用され、特に第二次ベビーブーム世代の将来的な入学増が見込まれた70年代頃に、少数の地域ではあったが、比較的広く採用されるにいたった(国民教育研究所 木下春雄編 1988)。

ただし、この制度には当初から批判も多かった。この制度によって、本人の意思と無関係に、場合によっては遠方の高校を割り当てられたりすることもあったからで、特に80年代以降の「個性重視」という教育理念の流れとは明らかに矛盾するものとなった。また、特に東京都では、この制度により「行きたい学校に行けない」都立からの受験生の逃避が進み、都立高校の凋落を招く一方、進学に有利な高校は学費の高い私立高校に集中するようになったため、むしろ格差の拡大という皮肉な結果を招いたのではないかと、という指摘もある<sup>3)</sup>。結果、90年代以降の少子化に伴い、公立高校も生存競争に晒されるようになったことから、不人気の総合選抜制度を廃止する自治体が相次いだ(篠原編 2002)。

しかしながら、総合選抜制度がもたらしたものは何なのか、という実証研究は、岩木(1977)を除き、事実上ほとんどなされていないのが実情である。特に総合選抜制度は、制度そのものの検証という以前に、学校間の競争が必要であるとする否定派と、受験競争によってもたらされる格差をネガティブに捉える肯定派との間でイデオロギー論争に陥るケースが非常に多く、実態の解明に迫るものは非常にまれであり、あったとしても基礎的な分析にとどまる(土屋編 2000)。本稿では、消えつつある総合選抜制度とは何だったのか、生徒にいかなる影響を及ぼしたのものなのかということ、実際のデータを用いて明らかにすることを目的とする。

## 2 分析の視角と方法

### (1) 本研究の課題

上記のように、学校組織とその組織内社会化、という文脈で、いわゆるトラッキングの効果をみる研究は、教育社会学の分野でも非常にメジャーなものである。日本の場合、トラッキングが事実上の学校間の難易度に基づく格差がトラッキングと読み替えられてきたことは冒頭に触れたとおりだが、一般的にも、どの高校に進学することで事実上進路が制約されてしまう傾向があることが強く認識されており、また強い学歴に対する社会的眼差しを背景に、進学先の高校によっては強い劣等感や、逆に過度の優越感（に基づく差別意識）を抱くことが問題にされてきた。したがって、特に教職員組合を中心に、高校間の学力格差や、受験競争を緩和する運動が、盛んに繰り返されてきた。

そういった過程の中で、まず手をつけられたのは高校入試制度である。人々の選択や行為は、わざわざ制度論の理論的枠組みを持ち出さなくとも、実質的に制度のあり方に強く依存することは経験的に理解できる。つまり、どういう学校選択をし、どういう受験対策を行うか、ということは、実際の入試制度にも左右される。日本の教育では、しばしば過度の受験競争が問題視されてきたが、高校入試に関していえば、社会通念とは異なり、必ずしも学力一辺倒であったわけではなく（例えば、配点の半分程度は調査書が占める、というのは、ほぼすべての公立高校に共通している）、またその制度は公立でも都道府県により大きく異なり、一言で語りつくせるものではない。しかも、入試制度はかなりの頻度で変更を加えられている。つまり、マクロ社会において、高校や大学への進学率の上昇、人口の増減に伴う競争レベルの変動、その地域社会によって普通科高校が多いか、私立高校が多いかといった高校の設置状況の差異とその変化、また隣接自治体への進学先の流出もしくは流入が多いか少ないか、また現行制度への批判が多いか少ないか、といった様々な社会的な環境の違いが存在しており、その中で制度の変更が行われているのである。受験生も、その社会的環境からフリーな状態であることはありえず、さらに現行の制度に強く制約を受けながら、準備を進めるのである。

ところが、様々な入試制度が存在し、そのことが人々の行為選択や意識に影響があることを想定していながら、実際にはそのことを検証したものは、非常に稀である。例えば、学校間格差の明確になりやすい単独選抜（つまり志望校を1つ選択し、その高校を直接受験する）の場合、どこの高校に進学すべきかという悩みが生じ、また学校の選定ということを強く意識せざるを得ない。そして中学校時点の成績によって、存在する高校ランクに基づいて自己選抜を予め行ってしまふ（Kariya and Rosenbaum 1987）。一方、総合選抜制や小学区制の場合、一定水準の成績さえ取っていれば、

成績そのものが進学先の高校を強く制約することはないことになっている。要するに、高校に進学するに足る最低限の成績があれば、あとはどの高校に割り振られるかわからない、もしくは進学する高校の選択の余地がないのである。したがって、後者の方が、相対的に成績が悪くても、進学へのアスピレーションを維持できるだろうし、逆にいえば、成績のよい生徒の高いアスピレーションが抑えられていることも考えられる。要するに、成績とアスピレーションの関連が、前者では明確であり、後者では不明確になる、という予想ができる。

そこで本稿では特に、入試制度と中学3年時の成績、高校卒業後の進路希望の3変数の関係から、この問題を検討してみたい。以下のセクションにて、本稿で採用する分析モデルについて述べたい。

## (2) 分析モデル・方法

本稿で用いるのは、順序尺度を対象としたログリニア・モデル分析である。どの学校段階まで進学したいか、という問いは、同一学校段階内部の質を問わなければ、順序の尺度と見なすことができる。また、中3時点での成績評価も基本的には順序尺度とみなすことができる。通常は、成績上位者は、より強い進学アスピレーションをもち、成績下位者は、進学アスピレーションが冷却されている、と予想される。これまでの学校文化研究などの成果を念頭に置けば、単独選抜によって学校間の格差がはっきりしているところほど、学校と成績の結びつきが強くなり、結果として中3時の成績とアスピレーションの関係も強化されよう。一方、総合選抜制度のもとでは、そのような関連は薄くなるのではないかと考えられる。

ここでまず、ログリニア・モデルの考え方について説明しよう。クロス集計表を出したとき、最も理想的なのは、周辺分布に依る形で、各セルの度数も分布しているという状態である。例えば、成績の上中下3段階に所属する人が3分の1ずついて、高卒・短大・四大を志望する人も3分の1ずついたとすれば、各セルの期待度数は全体の人数の1/9になるはずである。仮に大学志望が1/2、高卒と短大が1/4ずつと仮定すると、成績に関係なく、四大志望者は1/6ずつ各セルに存在することになるはずである。しかし実際には、経験的に成績と無関係に大学を志望することは起こりにくく、周辺度数の分布とは別に、成績上位層は期待度数より多く大学進学を志望する確率が高く、逆に成績下位層は大学進学志望者の確率が低くなるだろうと推定できる。このような分布の偏り(違い)は、単に周辺度数に基づくパラメータのみで計算できず、成績とアスピレーションの交互作用を想定したパラメータが必要になる。もし3次元のクロス集計を考えれば、事態はもっと複雑になる。

仮にあるセルの度数を $F_{ijk}$ で表すとすると、

$$F_{ijk} = \eta \pi_i^A \pi_j^B \pi_k^C \pi_{ij}^{AB} \pi_{jk}^{BC} \pi_{ki}^{CA} \pi_{ijk}^{ABC}$$

となる。もしこの両辺の自然対数をとれば

$$\log_e F_{ijk} = \mu + \lambda_i^A + \lambda_j^B + \lambda_k^C + \lambda_{ij}^{AB} + \lambda_{jk}^{BC} + \lambda_{ki}^{CA} + \lambda_{ijk}^{ABC}$$

と線形モデルの形に表記できる(それがログリニア=対数線形、とよばれる所以である)。このとき、3次元のクロス集計であっても、例えば本稿の例でいえば、成績とアスピレーションの関係には学校ごとの違いがない(学校による交互作用がない)ということであれば、実際は3次元にする必要はなく、成績とアスピレーションの2次元でみたほうが、少なくとも数学的には単純である。上記の式は、3次元交互作用まで見込んだ飽和モデルとよばれるものだが、実際の観測度数をもとに、飽和モデルより単純で節約的(parsimonious)なモデルで観測度数を推定しようとするのが、ログリニア・モデル分析を行う最大のインセンティブである<sup>4)</sup>。仮に学校をX、中3時成績をY、進学希望をZとすれば、上記の飽和モデルは[XYZ]と表現できる。飽和モデルは3次元交互作用を想定しているので、一段階節約的なモデルは、[XY][YZ][ZX]となる。これが意味するのは、学校によって中3時の成績が異なり[XY]、中3時の成績に進学希望は依存し[YZ]、また進学希望も学校によって異なる[ZX]、ということで、学校と中3時成績と進学希望の3変数が同時に複雑に絡み合っていることは想定していない、ということである。

以上は、一般的な対数線型モデルの考え方である。しかし順序尺度同士の変数間の関係は、隣接するセル同士のオッズ比をもとに、一様連関モデル(uniform association model)や対数乗法連関モデル(log-multiplicative model)など、特有の変数間の連関パラメータを導入することで、より単純なモデルを推定することができる。このような方法は、社会移動や社会階層研究において、特に移動表分析により発展してきた。本稿ではそのアイデアを援用する。

隣接するセル同士の関係に着目したとき、オッズ比が一定の関係にあるものを一様連関モデル、オッズ比が一定の割合で増加してゆくのが対数乗法連関モデルとよぶ。2変数間の関係においてあるモデルが採択され、その傾向(例えば連関パラメータ)の強弱のみが違うというような場合、第三の変数の次元における連関パラメータの大きさを測定することで、二変数の関係がどこで強く、どこで弱いか、というような比較することが可能になる(Yamaguchi 1987; Wong 1990; Xie 1992)。

$$\log_e F_{ijk} = \mu + \lambda_i^A + \lambda_j^B + \lambda_k^C + \lambda_{ij}^{AB} + \lambda_{ik}^{AC} + \phi \beta_{jk}^{BC} \dots (1)$$

上記は三次元クロス表における2変数の一様連関モデルを示す。BCの2変数の隣接セルにおけるオッズ比によって、BC間の連関の強さが示される。もし、BCの連関の強さが、学校によって異なるという場合は、 $\phi$ に添え字をつけ、次のようなモデルで示される。

$$\log_e F_{ijk} = \mu + \lambda_i^A + \lambda_j^B + \lambda_k^C + \lambda_{ij}^{AB} + \lambda_{ik}^{AC} + \phi_i^A \beta_{jk}^{BC} \dots (2)$$

つまり、BCの連関を示す基本となるパラメータが存在するが、その大きさが単純に、学校ごとに $\phi$ 倍の関係にあるということを示す。一方、対数乗法連関モデルは、クロス表の隣接セル同士のオッズ比がどれも一様という一様連関モデルの制約を緩めたもので、行の効果を示すパラメータと、列の効果を示すパラメータの積によって、連関を示すパラメータが表現される。

$$\log_e F_{ijk} = \mu + \lambda_i^A + \lambda_j^B + \lambda_k^C + \lambda_{ij}^{AB} + \lambda_{ik}^{AC} + \phi \mu_j^B \nu_k^C \dots (3)$$

そして一様連関モデルのときと同様、学校ごとに連関パラメータが異なる、というモデルを想定することができる。

$$\log_e F_{ijk} = \mu + \lambda_i^A + \lambda_j^B + \lambda_k^C + \lambda_{ij}^{AB} + \lambda_{ik}^{AC} + \phi_i^A \mu_j^B \nu_k^C \dots (4)$$

今回の調査データは、学校に依頼して回収したものである。このような「学校」というグループでクラスター化された構造になっているデータに対して、あたかも各サンプルがランダムに散らばっているかのように多変量解析を行うことは、必ずしも好ましいことではない(三輪・小林2005)。また、このような性質のサンプルでは、たまたま多くサンプルを取れた学校の分布の性質を、全体の結果が強く反映してしまう可能性があるため、あたかも1つのランダムサンプリングからの標本として扱うのは不適切である。したがって、分析の枠組み、単位として、学校という枠組みは、常に考慮しなければならない。

さて、本稿では、まず中学校時代の成績と進路希望に、強い連関があると仮定する。その上で、連関を示すパラメータが学校によって異なると予想する。単独選抜の高校では、中3時点での成績ごとに高校選抜が行われる傾向が強いため、高校内部の中3時成績や、進路希望の分散は小さくなるはずである。一方、総合選抜のもとでは、多様な生徒を抱えているはずだから、むしろ成績と進路希望の分散は高校内部で大きいはずである。

ただし、単独選抜を行っている学区では、事実上高校ランクと中3時の成績が概念として重なっているとも言え、学区全体としてみた場合には、中3時成績と進学希望の関係は強いのではないかと、と思われる。要するに、学校という変数を媒介に、成績と進路希望の関係が、一見薄まったように見えるだけになっていると予想できる。つまり、①中3時の成績と進路希望の関係を、完全に個別の学校に分けて検討すれば、この関係は総合選抜制のもとでの学校が一番強い、②しかし単独選抜の学区全体と、総合選抜の学校とで比較すれば、両者の関係は単独選抜の方で強くなる、という仮説が成立する。以下でこれを検証したい。

### (3) データ

本稿で用いるデータは、ある西日本の県の複数の高校に依頼して、2007年の春から夏、教室において集合自記式で回答してもらい、回収したものである。対象は入学したばかりの1年生で、高校における社会化の効果をみるのではなく、高校入試における選択、入試制度が及ぼすと思われる意識項目、中学時代の経験などが中心の質問紙となっている。入試による個人の態度などへの影響を調べることが目的であったので、あえて高校入学から間もない時期に調査を実施したということである。高校の選定は、隣接する学区で、一方では単独選抜、一方で総合選抜が実施されているとこ

ろを選び、地域性を類似させることで、制度による影響の差異を際立たせるように配慮した。ただし、この地区の総合選抜制度は2008年度をもって廃止されており、このデータは事実上最後の総合選抜制度による入学生を含んでいる。また、実際は総合選抜制度と平行し、推薦入学制度も導入されており、推薦入学制度は当然特定の高校を志願するものだから、総合選抜制度とは矛盾する側面がある。実際、回答を見ると、相対的に成績がよく、特定の高校への入学を（総合選抜制度の学区内で）望む生徒は、推薦入学を利用して入学している傾向があり、事実上、総合選抜制度は廃止前から骨抜きにされていたと見られる部分があったことは否めない。

またデータに関して、大きな制約がある。総合選抜制は政治的な論点となりやすく、それゆえ、調査依頼は難航した。比較対象となる単独選抜の学区のデータは、学科やランクを問わず、満遍なく集めることができたが、総合選抜制度のもとでの高校では協力を得ることが難しく、1校のみでの調査となった。したがって、この選定校が、この地域の総合選抜制の「すべて」を語っているか、代表性があるか、という点は、やや慎重に判断する必要がある。ただし、総合選抜制度は、中3時の成績に基づき、できるだけ各学校に成績の偏りがないように、人為的に配分するという制度であるから、今回検討する変数については、学校による大きな分布の偏りはない（事実上、総合選抜制度の高校全体の傾向を反映している）と考えている。したがって、依頼した高校は、単独選抜7校（うち1校は職業系の高校）、総合選抜制の高校1校となる。分析に使用した、中3時の成績と、進路希望に関する高校別の分布は、表1から3に提示した。分析にあたっては、フリーソフトのlemを利用した。

表1 調査依頼校における中3時成績と進路希望の関係

	大学以上	専門短大	高 卒	未 定	合 計	
A 高校	成績上位	256	9	41	306	
	行パーセント	83.7	2.9	13.4	100	
	真ん中	5	0	1	6	
	行パーセント	83.3	0.0	16.7	100	
	合計	261	9	42	312	
	行パーセント	83.7	2.9	13.5	100	
B 高校	成績上位	46	15	1	8	70
	行パーセント	65.7	21.4	1.4	11.4	100
	真ん中	88	34	5	44	171
	行パーセント	51.5	19.9	2.9	25.7	100
	成績下位	10	10	2	6	28
行パーセント	35.7	35.7	7.1	21.4	100	
	合計	144	59	8	58	269
	行パーセント	53.5	21.9	3.0	21.6	100
C 高校	成績上位	35	17	2	7	61
	行パーセント	57.4	27.9	3.3	11.5	100
	真ん中	69	38	3	23	133
	行パーセント	51.9	28.6	2.3	17.3	100
	成績下位	17	12	0	5	34
行パーセント	50.0	35.3	0.0	14.7	100	
	合計	121	67	5	35	228
	行パーセント	53.1	29.4	2.2	15.4	100
D 高校	成績上位	41	10	1	11	63
	行パーセント	65.1	15.9	1.6	17.5	100
	真ん中	80	32	2	38	152
	行パーセント	52.6	21.1	1.3	25.0	100

	大学以上	専門短大	高 卒	未 定	合 計	
D 高校	成績下位	16	13	2	17	48
	行パーセント	33.3	27.1	4.2	35.4	100
	合計	137	55	5	66	263
E 高校	行パーセント	52.1	20.9	1.9	25.1	100
	成績上位	33	3	11	9	56
	行パーセント	58.9	5.4	19.6	16.1	100
	真ん中	56	28	36	25	145
	行パーセント	38.6	19.3	24.8	17.2	100
	成績下位	15	17	27	12	71
F 高校	行パーセント	21.1	23.9	38.0	16.9	100
	合計	104	48	74	46	272
	行パーセント	38.2	17.6	27.2	16.9	100
G 高校	成績上位	6	5	2	1	14
	行パーセント	42.9	35.7	14.3	7.1	100
	真ん中	24	38	15	25	102
	行パーセント	23.5	37.3	14.7	24.5	100
	成績下位	29	29	7	14	79
	行パーセント	36.7	36.7	8.9	17.7	100
H 高校	合計	59	72	24	40	195
	行パーセント	30.3	36.9	12.3	20.5	100
	成績上位	2	1	0	2	5
G 高校	行パーセント	40.0	20.0	0.0	40.0	100
	真ん中	14	26	6	16	62
	行パーセント	22.6	41.9	9.7	25.8	100
	成績下位	26	39	17	49	131
	行パーセント	19.8	29.8	13.0	37.4	100
	合計	42	66	23	67	198
H 高校	行パーセント	21.2	33.3	11.6	33.8	100
	成績上位	84	17	5	22	128
	行パーセント	65.6	13.3	3.9	17.2	100
H 高校	真ん中	51	44	7	30	132
	行パーセント	38.6	33.3	5.3	22.7	100
	成績下位	15	19	5	14	53
	行パーセント	28.3	35.8	9.4	26.4	100
	合計	150	80	17	66	313
	行パーセント	47.9	25.6	5.4	21.1	100

※A～Gが単独選抜、Hが総合選抜の高校

表2 調査高校と中3時成績の関係

	成績上位	真ん中	成績下位	合計
A高校	306	6	0	312
行パーセント	98.1	1.9	0.0	100
B高校	71	171	28	270
行パーセント	26.3	63.3	10.4	100
C高校	61	133	34	228
行パーセント	26.8	58.3	14.9	100
D高校	63	155	48	266
行パーセント	23.7	58.3	18.0	100
E高校	57	145	71	273
行パーセント	20.9	53.1	26.0	100
F高校	14	102	79	195
行パーセント	7.2	52.3	40.5	100
G高校	5	62	131	198
行パーセント	2.5	31.3	66.2	100
H高校	128	132	53	313
行パーセント	40.9	42.2	16.9	100
合計	705	906	444	2055
行パーセント	34.3	44.1	21.6	100



表3 調査高校と希望進路の関係

	高卒	専門短大	大学以上	未定	合計
A 高校	0	9	262	42	313
行パーセント	0.0	2.9	83.7	13.4	100
B 高校	8	60	145	58	271
行パーセント	3.0	22.1	53.5	21.4	100
C 高校	5	68	126	35	234
行パーセント	2.1	29.1	53.8	15.0	100
D 高校	5	55	140	69	269
行パーセント	1.9	20.4	52.0	25.7	100
E 高校	75	49	104	46	274
行パーセント	27.4	17.9	38.0	16.8	100
F 高校	25	73	60	40	198
行パーセント	12.6	36.9	30.3	20.2	100
G 高校	25	66	43	67	201
行パーセント	12.4	32.8	21.4	33.3	100
H 高校	17	80	151	67	315
行パーセント	5.4	25.4	47.9	21.3	100
合計	160	460	1031	424	2075
行パーセント	7.7	22.2	49.7	20.4	100

### 3 分析の結果

ここでは連関を示すパラメータの学校間の大きさを比較したいので、上記の(2)か(4)のモデルの適合度を確認し、適合度検定によってそれらのモデルが棄却できなければ問題ないと判断し、その連関パラメータを検討する。なお、進路希望について、未定と回答した人のセルは除外した。

まず8校別の成績と進路希望のクロス表をあてはめたモデルである<sup>5)</sup>が、均一連関モデルの場合、 $G^2=26.479$  (d.f.=24, p=.329)であり、BICは-151.033となる。一方、対数乗法連関モデルでは、 $G^2=17.925$  (d.f.=22, p=.710)で、BICは-144.794となり、均一連関モデルから有意に改善されているとはいえないので、均一連関モデルのほうを採用して解釈したい。一方、単独選抜と総合選抜という枠組みでのクロス表についてみたモデルの場合、均一連関モデルは $G^2=34.214$  (d.f.=6, p=.000)と適合的ではない。しかし対数乗法連関モデルでは、 $G^2=2.404$  (d.f.=4, p=.662)となり、モデルは適合的である。そこで、こちらでは対数乗法連関モデルで解釈を行う。

表4 8校の高校別中3時成績と進路希望の連関パラメータ

高校名	パラメータ
A 進学校	-2.917
B	0.980
C 総合制高校	0.084
D	1.114
E 商業高校	0.930
F	-0.423
G	0.510
H 総合選抜制	1.384

表5 単独選抜7校と総合選抜1校での連関パラメータ

	パラメータ
単独選抜学区	1.333
総合選抜学区	1.172

表4が8校の高校別クロス表における中3時成績と進路希望の連関パラメータである。単独選抜のAからGは、中3時の成績が上位の人の多い順になっているが、A校は最上位校でほとんどが進学すること、また成績下位が存在しないことから、パラメータが異常値になっている。それを除けば、単独選抜学区においては、事実上中学時の成績によって進学先が決まっていくのだから、学校内の学力分散は小さくなって当然である。逆にいえば、総合選抜制度の敷かれている高校では、成績によって生徒を均等に振り分けるのだから、学校内成績の分散は拡大し、学校間の成績の格差はなくなる。そういったことを考えれば、成績と進路希望の連関パラメータが総合選抜制のH校で最も高いのは当然予想されるべきことであり、①の仮説は証明されたことになる。

問題は、学区別に比較したときに、双方とも大きく散らばっている中3時の学業成績と、本人の進学希望が、どの程度対応しているか、である。そこで、単独選抜の学区であるA校からG校までをまとめたサンプルと、総合選抜を行っている学区のH校とで、中3時の成績との関連をみる。単独選抜での調査対象校に、やや進学率の低い高校が多く含まれているとする向きもあるが、少なくとも、本サンプルにおける連関の度合いを示すパラメータは、単独選抜の学区のほうが大きくなっている(表5)。要するに、中3時の成績がよいほど、高校卒業後、より上の段階に進学するという関係が、単独選抜の学区ほど強く見られるということである。総合選抜に比して、単独選抜の高校は、高校「間」の個性が強く、進学実績も高校によりかなり差があるのが普通である。そして、特に進学志向のある学生は、進学に関連する情報を手に入れる傾向があり、そしてそれらの情報をもとに予期的社会化をはかりやすい、と考えられる。しかし総合選抜の場合、その地域の高校は大体どこも似たような進学実績になりがちである。そのようなことを考えると、単独選抜の高校と比較すれば、成績をもとにした予期的社会化、というのは起こりにくいだろう。実際には、高校3年間において、成績の変動は大きく起こりうるものである。その点を考えれば、単独選抜の高校では、上位の高校に行けば、確かに一層のやる気がかき立てられる可能性はあるが、そうでない生徒の冷却化が起こりやすくなるという負の面は否定できない。このことが、高校間格差の固定化を促す。総合選抜の場合、成績がよくても、必ずしも(有名)大学、という進路選択をしなくなるかもしれないが、逆にいえば、生徒のやる気を一定程度維持し、場合によっては中3時の成績を超える「逆転」を起こさせる可能性も高くなるかもしれない。いずれにしても、入試選抜方法は、どこに焦点をあてるかによりその功罪の評価が変わりうるものであり、総合的な評価が求められるといえよう。

## 4 まとめと今後の課題

本論文において、隣接地区にある単独選抜の学区と、総合選抜の学区の高校との間で、進学に対するアスピレーションと成績の関係を検討した。データに一定の制約はあるが、①高校内部における成績とアスピレーションは、総合選抜の高校のほうが強いが、それは単独選抜の学区の場合、学校そのものと中3時成績が結びついているため、学校内成績の分散が少なくなっているためであり、②学区としてみた場合には、単独選抜のほうが総合選抜と比較してアスピレーションと成績の関係が強かった。もっとも、中3時点での成績の分布をみると、総合選抜の高校のほうが成績上位に偏っているようであり、単独選抜における成績下位校が過剰にサンプルに含まれている可能性はある。例えば、単独選抜の高校の中には、商業高校が含まれており、その高校が単独選抜の学区の中で必ずしも下位に来ているとは評価できないが、それ以外にも、総合制高校や、普通科高校の中に一部の職業系学科が含まれている学校も、単独選抜学区のサンプルに含まれていることを考慮したほうがいいだろう。また、総合選抜における成績上位層は、かなりの割合が推薦入学によって入学している経緯があり、実際は純然たる総合選抜制が実施されていたわけではない。しかしそれでも、総合選抜制の実施により、この地区の高校間格差は、最小限にとどめられていたことも事実である。一方、ここで一つの指標として用いている成績は、本人の自己申告によるものである。個人情報の問題が強く意識される中、実際の生徒の成績を客観的な得点で手に入れることは事実上不可能であり、多くの学校調査では、本調査と同様の方法をとって、本人に自己評価をさせている<sup>6)</sup>。当然このことも分析における大きな限界の一つである。というのも、自己成績の評価自体が、選抜制度や、地域の高校間格差のあり方、進学先の高校に左右されている可能性は否定できないからである。通常は、中3時の成績があつて、それをもとに高校選択をしているという因果関係が想定され、確かにそれは間違っていないだろうが、本調査は高校入試を経た生徒に実施しているため、進学した先の高校の間一般における評価に引っ張られる形で、高校の評価をもとに自分の過去の成績の評価を行っている可能性は否定できないからである。以上のような制約を考慮して、解釈を行う必要はあろう。

今回は、調査票の中の、アスピレーションについてのみ、特に着目した。しかし、こういった高校入試制度が、下の段階の学校（この場合は中学校）における学校生活へのコミットメントに何らかの影響を与えるのか、あるいは生徒の意識に影響を与えるのか、といったことは、まだ明らかになっていない点も多い。総合選抜制自体は、ほとんど行われなくなっているため、類似の調査を行うことは限りなく困難になっている。得てして、こういった入試制度の変革は、政治的イデオロギーの対立の場となりがちだが、問題なのは、選抜制度に対する実証的な評価が行われることが、日本ではまだ非常に少ないことである。そういった改革は、印象論を背景に進められていることが多いが、まずは正確な入試制度の影響を測るためにも、資料をしっかりと集め保存することが求められよう。

## 【注】

- 1) ウィスコンシン・モデルの発展については、Sewell, Hauser, Springer, and Hauser (2004) によるレビューを参照。
- 2) トラッキング研究とは若干コンテキストがずれるが、日本においては学業成績に基づいて自ら「相応の」進路選択をするメカニズムがうまく作用し、過度のアスピレーションの過熱は起こりにくい、とされている。また、成績を重視するのは進学に限られたことではなく、就職においても影響をもつため、成績上位層から脱落しても、一定程度学業や学校の規律に自ら組み込まれるというメカニズムが働くように機能している (Kariya and Rosenbaum 1987; 荻谷 1991)。
- 3) Kariya and Rosenbaum (1997) は、この現象を、強制バス通学などの公立学校における人種混合政策により白人が公立学校を忌避するようになったという white flight とよばれる現象になぞらえて、bright flight とよんでいる。
- 4) ただし、実際の分析では、まず最も単純な、各変数の主効果のみからなる独立モデルを想定し、そこから徐々に交互作用効果や、連関パラメータを投入することで、有意にモデルが改善されているかを確認しつつ、最適なモデルを選択するという方法をとる。その際、推定しているモデルから導き出される期待度数と、観測度数の差から、尤度比カイ二乗値が計算されるが、当然両者の差が大きければ、その推定モデルは現実から乖離している、とみなされる。要するに、ここでは「推定モデルから導き出される期待度数と、観測度数の間には差がない」という帰無仮説が提示され、尤度比カイ二乗値が大きければ、この帰無仮説は棄却される。
- 5) 今回の分析では、中3時成績とアスピレーションの関係を示すパラメータそのものの学区間・学校間比較を行いたかったため、あえて連関パラメータが学校や学区によって異なるというモデルを採用したが、適合度検定では、実際には各学校(学区)同じ大きさのパラメータで推定しても大きな問題はないことがわかった。バタナー(節約的)モデルを探すという意味では、実際は成績とアスピレーションの連関パラメータは学校にかかわらず同一というモデルのほうが優れているが、本稿では連関パラメータの大小そのものに関心があるので、あえてそれを採用しなかった。
- 6) 学校調査に限らず、社会階層と社会移動に関する調査(SSM調査)でも、この調査と同様、中3時の成績を5段階で評価させる方法をとっている。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金「地域社会における総合選抜制実施と影響に関する実証研究(若手B)」(課題番号18730523)による研究成果の一部である。

## 【参考文献】

- 藤田英典, 1980「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択－高学歴時代の自立の条件』有斐閣: 105-129.
- 元治恵子・片瀬一男, 2008「進路意識はどのように変容したのか－ジェンダー・トラックの弛緩?」海野道郎・片瀬一男編『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣: 94-118.
- Ishi-Kuntz, Masako, 1994, *Ordinal Log-Linear Models*, Thousand Oaks: Sage.
- 岩木秀夫, 1977「総合選抜制度の教育効果－学力水準との関連で」『教育社会学研究』32: 80-92.
- , 1980「中・高校生の学校生活と進路形成－中等教育の構造と機能に関する研究(1)」『東京大学教育学部紀要』20: 59-86.
- 荻谷剛彦, 1991『学校・職業・選抜の社会学－高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会.
- Kariya, Takehiko, and James E. Rosenbaum, 1987, “Self-Selection in Japanese Junior High Schools: A Longitudinal Studies of Students’ Educational Plans,” *Sociology of Education*, 60: 168-180.

- , 1999, "Bright Flight: Unintended Consequences of Detracking Policy in Japan," *American Journal of Education*, 107: 210-230.
- 国民教育研究所・木下春雄編, 1988『高校入試制度の改革』労働旬報社.
- 耳塚寛明・苅谷剛彦・榎田大二郎, 1981「高等学校における学校活動の組織と生徒の進路形成－高校生の生徒文化と学校経営 (2)」『東京大学教育学部紀要』21: 29-52.
- 三輪哲・小林大祐, 2005「階層帰属意識に及ぼす地域効果の再検討－階層線形モデルの可能性と限界－」『社会学研究』77: 17-43.
- Oakes, Jeannie, 1985, *Keeping Track: How Schools Structure Inequality*, New Heaven & London: Yale University Press.
- 尾嶋史章, 2001「進路選択はどのように変わったのか－16年間にみる進路選択意識の変化」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学－進路・生活・世代』ミネルヴァ書房：21-61.
- Sewell, William H., Robert M. Hauser, Kristen W. Springer, and Taissa S. Hauser, 2004, "As We Age: A Review of the Wisconsin Longitudinal Study, 1957-2001," *Research in Social Stratification and Mobility*, 20: 3-111.
- 篠原清昭編, 2002『総合選抜制度解体の研究：高校入試制度と平等の崩壊』九州大学大学院教育学部門：教育法制研究室.
- 竹内洋, 1995『日本のメリトクラシー－構造と心性』東京大学出版会.
- 土屋基規編, 2000『高等学校の入試制度および通学区制度の社会的心理的影響に関する調査研究 (中間報告書)』科学研究費報告書.
- Wong, Raymond Sin-Kwok, 1990, "Understanding Cross-National Variation in Occupational Mobility," *American Sociological Review*, 55: 560-573.
- Yamaguchi, Kazuo, 1987, "Models for Comparing Mobility Tables: Toward Parsimony and Substance," *American Sociological Review*, 52: 482-494.
- Xie, Yu, 1992, "The Log-Multiplicative Layer Effect Model for Comparing Mobility Tables," *American Sociological Review*, 57: 380-395.

**[Abstract]**

## **Influences of Tracking and Entrance Examination Systems on Students' Aspirations for Advancement to Higher Education**

Wataru NAKAZAWA

The aim of this paper is to examine if there are any differences in students' aspirations for advancement to higher education with two different entrance examination systems. These two entrance examination systems are as follows: One is the mainstream system in which students can select one high school they wish to attend and must pass the entrance examination to enroll in it. The other is the rapidly declining system in which students take examinations and are randomly assigned to schools within their school districts on the basis of their examination scores. The former system often leads to intense competition for getting into prestigious high schools and makes clear distinctions on the basis of students' academic achievement. The latter system does not make such distinctions due to the random assignment of students, and tends to ease the intense competition for enrollment in specific schools. If we consider the research on the tracking system, we can hypothesize that the former system strengthens the association between students' academic achievements and their aspirations for advancement to higher education, and the latter system weakens it. A questionnaire survey was conducted to compare this association for these two different systems. As a result of ordinal log-linear table analysis, the hypothesis was generally supported.